令和4年度
広島平和記念式典
中学生派遣事業
感　想　文

広島平和記念公園（広島市）原爆ドーム前にて

磐　田　市

《目次》

平和とは　磐田第一中学校　河合　沙奈…1
語り継ぐべきもの　城山中学校　山﨑　温輝…1
受け継がれていくもの　向陽中学校　多田　杏羽…2
原爆と平和　神明中学校　石間　来愛…2
「昔の出来事」では終わらせない　南部中学校　永井　実結…3
明るい未来へ　福田中学校　福川　大智…4
過去から学ぶ尊い平和　竜洋中学校　大原　孝太…4
平和のカタチ　豊田中学校　飯田　光里…5
平和への考え方　豊田南中学校　中本　佑馬…6
広島派遣を受けて　豊岡中学校　松島　琢哩…6
意識の変化　磐田東中学校　鈴木　千穂…7

（凡　例）

・本書は令和四年度広島平和記念式典中学生派遣事業の参加者の感想文をまとめたものです。

・誤字・脱字などを除き、原文のままで掲載しています。

平和とは

磐田第一中学校　河合　沙奈

二〇二二年八月六日の広島には、青空が広がっていた。爆心地の周りや広島市には、たくさんの建物が立ち並び、交通量も多く、たくさんの人が暮らしていた。七十七年前のこの日、どのようなことがあったのか。堂々と建つ原爆ドームが静かに、それでも力強く物語っているように感じた。

八月六日に行われた平和記念式典。五日にも、平和記念公園に訪れたが全く違う雰囲気で、八月六日の広島でしか味わえない緊張感や戦争への思い、平和を強く願う気持ちなどたくさんのことを体感した。

また、私は安田女子高で見た被爆桜が一番印象に残っている。七十七年前、爆風に耐えずっと生き続けているとは思えないほど、力強く根を張っていた。それを見て、大きな勇気をもらうと共に、戦争は昔の出来事ではなく、身近に感じるべき、考えるべきことだと強く思った。

コロナ禍で世界が大変な中、八月六日に広島に訪れるという本当に貴重な体験をさせていただき、感じたのはあたり前なんて一つもないということだ。友達とたわいのないことで笑い合えること。ご飯を家族みんなで、お腹いっぱい食べられること。そして、今生きていること。多くのことをあたり前だと感じられることこそが、幸せで平和なことではないかと二日間の派遣を通して、私は考えた。平和のために私たちができることは、戦争について学び、次の世代に繋げること。日々の生活に感謝することだと思う。そして、戦争は昔に起こった一つの出来事ではなく、身近に感じて一人一人がよく考えるべきことだと思う。十年後も百年後も受け継がれる出来事にするため、私たちは自分の思いをしっかりと持ち、行動していきたい。

語り継ぐべきもの

城山中学校　山﨑　温輝

僕は、八月五日、六日の二日間実際に広島へ足を運び平和学習をおこない、戦争や、原子爆弾について学びました。

僕は、特に安田女子高校への訪問が心に残りました。当時の安田女子高校では、僕たちと同じぐらいの年の生徒が命を落としました。それを今安田女子高校に通う生徒が被爆者の思いを一人一人が考え、後世へ語り継いできていることを知りました。そのようなことを学ぶなかで、これから先、語り継いでいくべきことは、戦争の悲惨さや、原爆についての知識ではなく、被爆者一人一人の思いや、戦争で命を落とした方々の思いなのではないかと感じた。また、被爆者や戦争経験者の平均年齢は、八十四歳と高齢化してきている。そこで、僕たちのような若い世代の層がしっかりと被爆者の思いを考え、それを後世に伝えていかなければならない。

思いを感じ取るためには、まず知識をつけないといけない

ので、今回このような事業に参加できて本当に良かったと思う。これからも語り継ぐべきものは「思い」ということを心にとめ、生活していきたい。

受け継がれていくもの

向陽中学校　多田　杏羽

一九四五年八月六日午前八時十五分広島に世界で初めてアメリカによって原子爆弾を落とされた。一つの原爆で約十四万人ものとうとい命が奪われた。無罪の人々が戦争という醜い争いに巻き込まれ、私はこの事実に対してフィクションのように考えていた。はるか昔の出来事で他人事だと思っていた。今回広島へ行き残酷で衝撃なものを目の当たりにした。八月五日に平和記念資料館へ行った。そこでは被爆した方々の気持ちが表されていた。「助けて」「水をください」という助けを求める声、動く気力のない母に抱きつく幼児、必死に声をかける人の姿などが展示されていた。一瞬の光りで動けなくなる恐怖、私には想像がつかない。泣きたくなるほど怖いけど泣く事も許されないという時代。少し遅く生まれた私たちは毎日笑って食べて過ごしている。もう二度とこのようなことをおこしてはいけない。私たちはその責任があると思う。八月六日平和記念式典に参加した。資料館で見た光景と重なった。私は鳩が飛んでいく場面が印象に残っている。一直線に飛んでいく姿はとても虚しくなった。私と同じように戦争のことをフィクションのように考えている人が多いと思う。私はこの二日間を通して本当にあった出来事なんだと痛感した。「安からに眠って下さい過ちは繰返しませぬから」この言葉を理解することができる日は来るのだろうか。より平和について学び世界中の人々が幸せな日常を暮せるようこの二日間で学んだことをたくさんの人に共有したい。すばらしい体験をさせていただきありがとうございました。

原爆と平和

神明中学校　石間　来愛

私は今回の広島派遣事業で多くのことを学んで来ました。今までテレビや教科書でしか学べなかった原爆に関するものを実際に見たときは大きな衝撃を受けました。

最初に行った安田女子高校では、多くの生徒と教員の方が亡くなられたことを知り、原爆の威力の恐ろしさを学びました。一瞬にして多くの人の命を犠牲にする原爆は、絶対に使わないようにしなければいけないと思いました。

平和記念公園に向かうと、一番最初に原爆ドームが見えました。天井が骨組みだけになっていて、近くで見ると壁がはがれていて、今にも崩れそうでした。それから園内の折り鶴台には、全国から集められた多くの折り鶴があり、人々の平

和を願う気持ちの強さを実感しました。

次に向かった平和記念資料館では被爆資料を見ました。被爆後の写真からは悲しみを感じられ、原爆の恐怖とそれが生み出す悲惨さを学びました。

最後に平和記念式典に参列して帰って来ました。世界から多くの人が集まっていることや国連の方が平和についてお話されるのを聞いて、日本だけでなく、世界中に平和を願っている人がたくさんいるということを実感しました。

しかし、今の世界には多くの核兵器がある上に、その使用が危惧されています。平和な世界をつくるためには、核兵器の恐ろしさを知り、これから使用されないような努力をしなければいけません。一人一人がその努力をすることで平和な世界ができあがると思います。

私は今回の広島派遣事業を通し学んだ原爆の恐ろしさと平和の大切さを身近な人々などに伝えていこうと思いました。

「昔の出来事」では終わらせない

南部中学校　永井　実結

この研修に参加する前の私は、正直、原爆は、「過去の出来事だ」と思っていました。しかし、この二日間、実際に広島へ行き様々なことを学んだことで私の考えは変わりました。

二日目に訪れた原爆資料館で見たものは、どれも衝撃的なものばかりでした。黒こげになった弁当箱、火傷でパンパンになった人の顔、溶けて変形した鉄らは、どれも原爆の悲惨さを物語っていました。原爆が爆発した瞬間の爆発点の温度は数百万度になり、爆心地周辺の温度は三千度から四千度にもなったそうです。そのため、当時広島市にいた多くの人々は何がおこったのかも分からず、逃げることすらできずに亡くなってしまいました。たった一瞬で約十四万人もの人の命がうばわれたのです。「水を下さい」と叫ぶ人、子供を探すお母さんの声、ただれた皮膚がたれ下がった両腕をつき出して歩く人、川にとび込む人であふれ、その時の広島にはまさに地獄絵図のような光景が広がっていたそうです。さらに、原爆は通常の兵器とは違い、人体に有害な放射線を出します。そのため、直接被爆しなかった人も放射線を受けたことで病気になったり亡くなったりする人も大勢いました。加えて、「原爆の子の像」のモチーフにもなっている佐々木禎子さんのように白血病やがんなどの後障害で長期にわたって苦しめられた人もたくさんいました。七十七年たった今でもなお後障害で苦しんでいる人がいます。

にもかかわらず、未だに世界には核兵器が存在しています。そのうえ、今年の二月頃にはロシアによるウクライナ侵攻が始まってしまいました。しかし、戦争は悲しみを生むだけであり決して起こってはならないものです。そんな今だからこそ核の惨禍を「昔の事」で終わらせず、「今」の私達にも無関係ではないことを自覚しこの研修で学んだことを多くの人へ伝えていきたいです。

明るい未来へ

福田中学校　福川　大智

僕は平和記念式典に参加する前までに、平和について、正直、あまり考えたことはありませんでした。戦争のことも、中学校の社会の授業で触れたくらいでした。しかし、今回の経験を通して、平和についてのことを学ぶことができ、戦争というものは二度とくり返してはいけないと、強く思うようになりました。

あなたにとって、「日常」とは何ですか。僕は、当たり前なことだと思います。学校に行くこと、友達と話すこと。七十七年前、八月六日、罪なき十四万人もの人々が、広島で「日常」を奪われました。子ども、女性、男性たちは、地獄のような炎に焼かれました。生き残った方々も、放射能による後遺症に苦しめられました。そして、この十四万人もの「日常」を一瞬にして奪ったのが、原子爆弾です。原子爆弾を作ったのは人類なわけですから、人類が人類を痛め付けているわけです。また、今でも地球には、約一万三千発の核兵器が存在します。あの悲劇から七十七年たった今、平和について考えている人も増えていますが、地球上には、原子爆弾の一〇〇〇倍の威力がある水素爆弾などが存在するようになり、いつ、七十七年前のような悲劇が、また、それ以上のことが起こってもおかしくありません。もし、そのようなことが起こったら、人類は滅びるでしょう。

アーノルド・J・トインビーという歴史学者が、民族が滅びる三原則というものを述べました。その一つに「歴史を忘れる」というものがあります。今、私たちにできることは、この悲劇を絶対に忘れないということです。この悲劇を忘れずに、明るい未来へ向けて、歩みを進めましょう。

過去から学ぶ尊い平和

竜洋中学校　大原　孝太

平和。それは今では当たり前として感じられること。僕は八月五日、六日と大切な日に広島で、多くの貴重な体験をさせて頂き、広島の方々の気持ちの温かさと原子爆弾の恐ろしさを改めて感じました。

初めに訪れた安田女子高校では、終戦から七十七年たった今でも春に花を咲かせる被爆桜や、原爆により亡くなった方の名前が入った慰霊碑を見ました。僕は安田高校の生徒の方が話してくださった慰霊碑に名前が入っている理由が印象に残っています。それは「大切な人を亡くしたことを忘れない、忘れたくない」です。原爆の出来事だけではなく、被害にあった方、ひとりひとりが当時も現在も大切な存在であり、語り継いでいくべきことだと感じました。

次に平和記念公園内にある平和記念資料館に訪れました。灰になったお弁当。穴だらけの服。一発の原子爆弾が多くの幸せを一瞬にして奪い、悲惨な光景を作り出したことを改め

て実感し、胸が苦しくなりました。そして今、僕達がご飯を食べられていること、家族、友達、先生などと毎日のように話せていること、そんな何気ない日常の全ては尊く、とても幸せな事だと感じました。

僕は、広島の方々のように、この出来事を無かったことのようにするのではなく、過去から学び、未来の平和、核兵器のない世界を目指すために訴えていきたいと二日間を通して思いました。そして現在、原爆被爆者の方々の平均年齢は八十四歳を超えています。これから原爆を経験した人は少なくなってしまいます。しかし、八月六日という日を忘れない、忘れさせないために、今回学んだことを生かし、この磐田市から発信していきたいです。

平和のカタチ

豊田中学校　飯田　光里

原爆投下から七十七年が経った今私は、あの日、人々が苦しみ、水を求め、必死に生きようとしたこの地を歩いた。

学校の授業を通して、核兵器の怖さや平和の大切さは何度も学んでいる。しかし、言葉や写真だけでは、怖さなどは伝わるが、深く考えようとまでは思えなかった。だから、今回の機会を大切に、戦争の恐ろしさや、原爆の知識を得て、「二度と同じことを繰り返してはいけない」と周りに伝えることを決めた。

私は、原爆資料館での光景が目に焼き付いて、胸が痛むような悲しみを感じた。原爆資料館には、小さな子供が火傷を負い横たわる写真、黒く焼け焦げた弁当箱、放射線の後遺症に苦しむ人の写真などが展示されていた。中には「死体と間違われて焼かれた少年」というものがあり、原爆から生還しても、死体だと思われて命を落とした人の話が書かれていた。これらを見て私は、罪なき人の命や日常を一瞬にして奪った原爆の怖さを今まで以上に痛感した。

あの日、もし原爆が落ちていなかったら、もっと違う未来が訪れたのだろうか。しかし、もう過去を変えることはできない。原爆ドームが物語る戦争の恐ろしさ。被爆桜が物語る命の尊さ。それらを自分の目で見て、自分の手で触れて、私は「原爆による人々の死、そして被爆者の方の思いを決して無駄にしてはいけない」と強く思った。

今もなお、まだ世界には核兵器が存在し、それらを使おうとする国もある。とても、平和とは言えない。そんな中、被爆者の方の高齢化が進んでいる。だからこそ私たちが、平和について継承していかなければならないと思う。

この貴重な二日間の経験を平和のカタチに変えていこう。そして誰もが「本当の強さ」をもてる世界になってほしい。

平和への考え方

豊田南中学校　中本　佑馬

今回、中学校代表として広島の平和式典参加ということで選ばれた。この体験を通して少しでも平和に対する考え方が変わりたいと望んで参加しようと決めた。事前学習会で他校の生徒に会って、自己紹介をしたり広島の原爆について共に学習を行った。八月五日、いよいよ広島へ出発となった。欠席者もなく、皆で行けることに安心した。

まず広島到着後に昼食をとり、その後安田女子高等学校への訪問をした。訪問のきっかけは高校内にある被爆桜の苗木を磐田市にいただいたことで平成二十三年から訪問が始まった。生徒会の方々から慰霊碑と被爆桜についてのお話があった。当時亡くなられた三百四十一名の追悼をするために作られ、毎年千羽鶴を奉納していることと、名前のとおり、この桜は原爆の際に被爆していて、幹が少し曲がっているが、生徒の皆さんが正しく手入れをして本当は寿命六十年の桜の木が現在も毎年にきれいな桜を咲かせている。

原爆資料館では、実際の写真や原爆を受けて面影のない自転車や弁当など現実とはかけ離れた光景を目にした。実際に自分で目にした光景は想像以上にきついものであった。お母さんに助けを求める子供達の叫びを連ねる文章。原爆の熱射によって、人影が残った階段の写真など僕の心に刻まれるようなものがたくさん展示されていた。これを見てもう二度と残酷で最悪の戦争は二度と起こしてはいけないと感じた。

この広島派遣を通して思ったことは、本や授業で習ったことと自分の目や肌で感じたことは全く別の物だと思った。とにかく戦争は二度と起こしてはいけないものである。日々、平和に暮らしていけることに感謝し、広島や長崎で起こった原爆を心に留め、平和に対する考えを持ち続けるべきだと思う。

広島派遣を受けて

豊岡中学校　松島　琢哩

私は、広島平和記念式典中学生派遣を心待ちにしていました。

昨年、やらずに後悔したことがありました。それから、自分のやりたいことを率先してしたいと思うようになり、『広島の平和記念式典に出る』と心に誓いました。他に、日本の歴史や趣味で軍艦が大好きだったので参加したいと思うキッカケにもなりました。

しかし、いざ名乗り出て確定した時、不安でたまりませんでした。引き受けたことを逆に後悔してしまったこともありました。日に日に増していくプレッシャーの中、結団式でその感情が一気に吹き飛びました。緊張で音を上げそうになるより、ワクワク感が勝ったのです。

他校の人達は、皆優しくて頼もしい人で、救われたような

感覚でした。当日、少し不安はありましたが、道中でたくさん話をしてくれて、すごく嬉しかったです。市役所の方も丁寧な説明と誘導で何一つ困る事無く終わりを迎えることができました。また、普段会うことがほとんどない市長などに出会えたのも良い経験となりました。

二日間という短い間ではありましたが、平和とは何なのか、今の私たちに出来ることは何か、数多くの事を学ぶことができました。被爆者の想いを踏みにじることなく胸に秘め、戦争と核兵器のない未来を創っていきたいです。

広島派遣は、自分の中でもとても意味のあるものでした。平和について学び、たくさんの出会いのある二日間でした。他の十人の人達とは十五日で最後になってしまうかもしれません。ですが、同じ広島の地に赴いた者として、同じ志を持ち、平和な世界を目指していきたいです。

関係者の皆さま、本当にありがとうございました。

意識の変化

磐田東中学校　鈴木　千穂

戦争や平和についての学習は社会科や道徳の授業で何度もしたことがありました。戦争は誰も幸せにすることができない絶対に起こしてはいけないもの、戦争の犠牲者のことは絶対に忘れてはいけないと強く思っています。しかし、今まで文面や映像にしか触れてこなかったのでどこか他人事のような気持が消えませんでした。

今回の広島への研修で、自分の目で見て、耳で話を聞き、他人事という意識がなくなりました。なかでも、安田女子校の生徒の方が、「広島は被爆をした場であるから一年を通して原爆について学ぶけれども、他の県では八月にだけ取り上げられることが多い。もっと原爆についての教育を推奨するべきだ。」と、おっしゃっていた事が、とても印象に残っています。平和記念式典では、岸田総理大臣や、広島市長、国連の会長など普段見る機会が少ない方々の思いを聞くことができ、私たちが平和や戦争について学ぶことが、戦争のない世界に向けての第一歩なのだと感じました。

この二日間で、戦争が他人事でなくなっただけでなく、ウクライナとロシアの戦争について関心が高まったり、戦争のない日常や家族が笑顔で暮らせることのありがたみをより感じたりと、たくさんの意識の変化がありました。

原爆投下から七十七年経った今でも亡くなった方や遺族の苦しみは無くなりません。世界には核兵器が無数に存在しています。今回学んだことを生かし、戦争と核が存在しない世界に向けて、多くの人に自分の思いを伝えたいです。

令和4年度　広島平和記念式典中学生派遣事業感想文

令和4年 10 月吉日発行

発行　磐　田　市

静岡県磐田市国府台3－1
磐田市総務部総務課　文書法制グループ
TEL　0538-37-4803